**聖霊降臨節第19主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年10月1日**

**「命の言葉」**

**申命記6章4節**

**6:4 聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。**

**使徒言行録7章17～43節**

**7:17 神がアブラハムになさった約束の実現する時が近づくにつれ、民は増え、エジプト中に広がりました。**

 **7:18 それは、ヨセフのことを知らない別の王が、エジプトの支配者となるまでのことでした。**

 **7:19 この王は、わたしたちの同胞を欺き、先祖を虐待して乳飲み子を捨てさせ、生かしておかないようにしました。**

 **7:20 このときに、モーセが生まれたのです。神の目に適った美しい子で、三か月の間、父の家で育てられ、**

 **7:21 その後、捨てられたのをファラオの王女が拾い上げ、自分の子として育てたのです。**

 **7:22 そして、モーセはエジプト人のあらゆる教育を受け、すばらしい話や行いをする者になりました。**

 **7:23 四十歳になったとき、モーセは兄弟であるイスラエルの子らを助けようと思い立ちました。**

 **7:24 それで、彼らの一人が虐待されているのを見て助け、相手のエジプト人を打ち殺し、ひどい目に遭っていた人のあだを討ったのです。**

 **7:25 モーセは、自分の手を通して神が兄弟たちを救おうとしておられることを、彼らが理解してくれると思いました。しかし、理解してくれませんでした。**

 **7:26 次の日、モーセはイスラエル人が互いに争っているところに来合わせたので、仲直りをさせようとして言いました。『君たち、兄弟どうしではないか。なぜ、傷つけ合うのだ。』**

 **7:27 すると、仲間を痛めつけていた男は、モーセを突き飛ばして言いました。『だれが、お前を我々の指導者や裁判官にしたのか。**

 **7:28 きのうエジプト人を殺したように、わたしを殺そうとするのか。』**

 **7:29 モーセはこの言葉を聞いて、逃げ出し、そして、ミディアン地方に身を寄せている間に、二人の男の子をもうけました。**

 **7:30 四十年たったとき、シナイ山に近い荒れ野において、柴の燃える炎の中で、天使がモーセの前に現れました。**

 **7:31 モーセは、この光景を見て驚きました。もっとよく見ようとして近づくと、主の声が聞こえました。**

 **7:32 『わたしは、あなたの先祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神である』と。モーセは恐れおののいて、それ以上見ようとはしませんでした。**

 **7:33 そのとき、主はこう仰せになりました。『履物を脱げ。あなたの立っている所は聖なる土地である。**

 **7:34 わたしは、エジプトにいるわたしの民の不幸を確かに見届け、また、その嘆きを聞いたので、彼らを救うために降って来た。さあ、今あなたをエジプトに遣わそう。』**

 **7:35 人々が、『だれが、お前を指導者や裁判官にしたのか』と言って拒んだこのモーセを、神は柴の中に現れた天使の手を通して、指導者また解放者としてお遣わしになったのです。**

 **7:36 この人がエジプトの地でも紅海でも、また四十年の間、荒れ野でも、不思議な業としるしを行って人々を導き出しました。**

 **7:37 このモーセがまた、イスラエルの子らにこう言いました。『神は、あなたがたの兄弟の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。』**

 **7:38 この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。**

 **7:39 けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、**

 **7:40 アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』**

 **7:41 彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつって楽しんでいました。**

 **7:42 そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれました。それは預言者の書にこう書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ、／お前たちは荒れ野にいた四十年の間、／わたしにいけにえと供え物を／献げたことがあったか。**

 **7:43 お前たちは拝むために造った偶像、／モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を／担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを／バビロンのかなたへ移住させる。』**

**先週は夏休みをいただきましてありがとうございました。もはや夏休みというのがはばかられるくらい季節が急に進みました。先々週の暑い中、まだまだ残暑が厳しい中で礼拝をしていたのが遠い出来事のように感じてしまいます。今週は最低気温が一桁の日が何日もあります。これから初めて迎える諏訪の冬に向けてしっかりと準備をしていかなければいけないなあと思っています。**

**そのまだ暑かった先々週の礼拝で私たちはステファノの説教の冒頭部分から共に聞きました。唆し、扇動し、偽りの証言を立ててまでなんとかしてステファノを亡き者にしたいとのユダヤ教の教会に属する人々の思いは、時の権力者たちの思いと同じでした。最高法院の場で絶体絶命のピンチに立たされたステファノは、見ている人たちが天使の顔のように見える笑顔で語り始めました。その反論の内容は自分の身を守るために自分の正しさを主張するものではありませんでした。神様の愛によって生かされているイエスキリストの十字架の贖いによって救われて今の自分がある、その喜びの中で穏やかに語るのはアブラハムから始まる神の民イスラエルの民の歴史でした。それは同時にその神の民イスラエルの民を忍耐強く愛して下さる神様の愛の歴史を語るのでした。**

**アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフと16節まででいわゆる族長たちの物語を語りました。アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフと語り続けると次に誰が来るかと言いますと、それはモーセ以外にはいません。出エジプト記から記されているモーセの物語をステファノは語り始めたのです。**

**モーセの生い立ち、40歳になり仲間のイスラエル人を助けようとしてエジプト人を打ち殺し、そのことがばれてしまってミディアン地方に逃げたこと。さらに40年たちモーセが80歳になり神様はモーセを召し出し、イスラエルの民をエジプトから救い出す指導者にされました。モーセは神様の召しに応え、イスラエルの民をエジプトから導き出しました。いわゆる出エジプトです。40年に及ぶ荒野の旅が始まりました。神様が与えて下さる約束の地を目指しての旅です。**

**その旅の間モーセは神様から与えられた御言葉を民に語り聞かせました。そのことが38節で記されています。**

**「この人が荒れ野の集会において、シナイ山で彼に語りかけた天使とわたしたちの先祖との間に立って、命の言葉を受け、わたしたちに伝えてくれたのです。」**

**この人とはモーセのことです。ステファノはモーセが神様から与えられて民に伝えた言葉を「命の言葉」と表現をしているのです。**

**「命の言葉」ステファノは旧約聖書を読み理解して、また自分なりに解釈してこの説教を語っています。実際の旧約聖書のモーセのことが記されている箇所にこの「命の言葉」という表現はありません。また「命の言葉」を聖書の元の言葉を直訳すると「生きる言葉」「とか「生きている言葉」になります。「生きる言葉」「生きている言葉」このどちらも旧約聖書のモーセの個所にはありません。いやそれどころか調べてみると旧約聖書のどこにも「命の言葉」も「生きる言葉」も「生きている言葉」もないのです。じゃあ、ステファノは聖書が言ってもいないことを、さらには神様が言ってもいないことをさも言ったかのように偽証人のように説教をしたのでしょうか。**

**もちろんそうではありません。ステファノは神様がモーセを通して民に語られた言葉が**

**「命の言葉」であり「生きる言葉」であり「生きている言葉」であると受け止めたのです。神様がその言葉を聞くイスラエルの人々を生かし、この言葉を聞くことによって苦しい荒野の旅を何とか乗り越えて前を向いて共に歩んでいくのです。この神の言葉を聞くことでエジプトという後ろを振り返ることなく、約束の地という神様の約束を信じてそこに委ねて路頭に迷うことなく、その歩みを一歩一歩進めていくことができるそのような人々を生かす言葉であるというのです。この神様の言葉があるから私たちは生きていくことができる、神様はイスラエルの民にそんな生ける命の言葉を語ってくださったのだ。この神様の言葉以外に頼れるものはないのだ、それほどに大切でなくてはならない言葉を語ってくださったとステファノは受け止めた。だからこそ「命の言葉」という表現をしたのです。**

**ここに命がある、ここに救いがある、それは恐らく今神様の言葉を命の言葉と受け止めていない、私たちを生かす言葉、生きている言葉であると受け止めていない、それどころか神様の言葉を都合のいいように解釈してイエス様を十字架に掛け、さらには不当な裁判でステファノを追い詰めている人たちへの批判もあったと思います。**

**そして、実際にモーセから「命の言葉」を聞いたはずのイスラエルの人々は、神様の言葉を「命の言葉」と信じて委ねきることができませんでした。目には見えない神様の言葉を信じて委ねて歩むことができなかったのです。そのことをステファノは39節以下で厳しく語ります。この39節からステファノの説教はがらりと変わります。**

**「7:39 けれども、先祖たちはこの人に従おうとせず、彼を退け、エジプトをなつかしく思い、**

 **7:40 アロンに言いました。『わたしたちの先に立って導いてくれる神々を造ってください。エジプトの地から導き出してくれたあのモーセの身の上に、何が起こったのか分からないからです。』**

 **7:41 彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつって楽しんでいました。」**

**イスラエルの人々は目に見えない命の言葉である神様の言葉よりも、目に見える神、金の子牛の像を作ってそれを神として拝んだのです。偶像礼拝です。目に見えない神の言葉を信じて委ねることができない。私たちを生かし生きる希望となる言葉と思えない、シナイ山に登っているモーセがなかなか降りてこない、モーセがどうなったかわからない、その様な人々の不安が、目に見える金の子牛という偶像の神を生み出したのです。そこに人々は平安を得たのです。人の手がつくった神が人を生かし、人に命を与えるものではないそんなことは十分にわかっているはずなのに、不安に駆られた人々は目に見える安心が欲しかったのです。**

**「命の言葉」「生きる言葉」「生きている言葉」そのような目に見えない不確かなものよりも、目に見える、触れることができる、目の前にあるそんな偶像を神としたのです。それは、今日の旧約聖書の言葉、申命記6章4節「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の神である」「唯一の神」ただお一人の神、父なる神様以外に神はいない、この最も大切な神様の言葉に背いたのです。神以外のものを神とする、この最も大きな罪を人々は犯してしまったのです。**

**目に見えない不確かな神様の言葉よりも、目に見えるものを神としてそこにすがりたい、その気持ちというのはわからなくはないです。**

**昨日は南信分区フェスタが富士見高原教会で行われました。ここ諏訪教会の近辺では国道を通行止めにして、歩行者天国にして地域のイベントが行われました。私は分区フェスタに参加していて、帰りに少し様子を見ただけですが、非常に多くの人が教会の前を歩いていました。そこには諏訪以外の人たち、県外から来た人たちも参加していたでしょうから「こんなところに教会がある」と初めて諏訪教会の存在に気づいた人も多いでしょう。**

**その中のどれだけの人が教会の前で足を止めて掲示板を見てくれたのかはわかりません。掲示板に掲げられているのは説教題の「命の言葉」です。はっきりとした大きなきれいな字で書いて下さった「命の言葉」の説教題をイベントに参加した人たちはどんな思いで見たでしょうか。**

**「命の言葉ってどんな言葉だろう」そのような興味を持ってくれた人もいるかもしれません。そうであるといいなと願っています。ただ残念ながら実際は全く関心を示さない人が多いのではないかと思います。「命の言葉」と聞いてもピンとこないし、私には関係がないと言う人が多いでしょう。**

**今の時代の人たちは、何か楽な方へ楽な方へと進んでいる気がします。インターネットが普及しパソコンやスマホで欲しいものがカンタンに手に入る時代です。コスパ、タイパなんて言葉でモノや時間の価値を測り、何か困ったことが起きてもすぐに解決させたいのです。命ってなんだろう、生きるってなんだろう、幸せってなんだろう、そんなことを時間をかけて真剣に考えるのはカッコ悪いと思われるのです。だから人と比べて自分がこんなに充実していることをSNSでアピールして何か満足した気になって紛らわすのです。**

**でも人生ってそんなに簡単なものではありません。自分の思い通りになんて決して行かないですし、悩みも苦労もたくさんあります。もうどうしていいかわからなくて途方に暮れる時がたくさんあります。思いがけない病気やケガで苦しまなければならないこと、地震や水害などの災害で路頭に迷うこともあります。**

**そんな私たちに本当に必要なのは、目に見えて安易な慰めや癒しを与えてくれるパワースポットでもなければ、頑張って努力して人を蹴落としてまで人の上に立つ人生を勝ち抜くことでもありません。そんな目には見えるけれども不確かなものが私たちに命を与え、私たちを生かしてくれるものではありません。**

**私たちを生かしてくれて私たちに生きる希望を与えてくれるのが「命の言葉」です。神様の言葉であり、「言は肉となった」（ヨハネ1：14）私たちのもとに人の姿で現れて下さった「命の言葉」であるイエス・キリストです。このイエス様の十字架と復活の愛を信じてそこに全てを委ねて歩むことが私たちを本当の意味で生かしてくれて、私たちに生きる希望を与えて下さるのです。そのイエス様が私たちと共に歩んで下さるからこそ、私たちはこの苦しみや悲しみの多い暗い世の中を希望を持って歩んでいけるのです。**

**そして、教会はこの世の中にあってステファノのように、ここに命がある、ここに救いがある、私たちを生かして下さるのは「命の言葉」であるイエス様であることを宣べ伝えていく使命があるのです。**